黒子さんのバブルバスジャック

KUROKO's Bubble Bath-Jack

黒子さんは、新人作家です。私立の学校の非常勤講師をしながら新作の構想をあたためているところです。あ、書店で開催するワークショップとかにも行ったりするのですよ、こっちは読者として。

とりもなおさず。

学期末の怒濤の定期テスト、採点、成績表つけが終わり、数日後の終業式を控え、寝不足でへろへろになっていたある日のこと。話なんか考える余裕もありません、そんな隙を物陰から狙うようにして物事は起こるんですよね。着信。

担当の編集者さんから中編、書きませんか？　と言われました。

この担当さん、名も無き花吹くかも分からない新芽である黒子さんをベテランの校正者さんとタッグでにこにこと扱き、可愛がってくれており（編集さんにとっては当たり前のようなことでもつい前までゲラさえ知らない新人はポカンとおどおどの連続です）、春から副編集長になります、お祝いに一本くらいお渡ししたいじゃないですか。黒子さんは二つ返事で引き受けた、ご指名いただいた、有り難い、とそんなことしか頭になかったのです。

さて。特集テーマと締め切りはメールで送られてくるとのこと、どういうものを書こうと黒子さんは頭の中の引き出しを探ります。

創作には三つのBが関わると言われているとか言われていないとか。

つまり、話の構想を練るには寝るとき（Bed）、風呂でリラックス（Bath）しているとき、…まあ黒子さんならバスケをしているとき、と言いたくなるでしょうが、三つ目のBはバス（Bus）、つまり移動しているとき、だそうですよ。

黒子さんは仕事をしながらも実は考えたりもしているのですが、彼はとりとめもないことを思いながら風呂に浸かっているといいアイデアが浮かぶようです。

どっこい、担当氏からの話を快く引き受けたその夜、黒子家の風呂釜は壊れました。